

OPAC 評価の実際 (若干のまとめ)¹

渡邊隆弘 (帝塚山学院大学)

レポート課題「WebOPAC の評価と改善提案」

勤務館もしくは適当な館の提供する Web 版 OPAC について、検索機能・表示機能・ヘルプ機能等の評価を行い、改善点を考える。

- ・ 全体的でも、特定の問題を突っ込んで論じていただいても可
- ・ 近隣図書館・同規模図書館・都道府県立図書館・NDL-OPAC 等、他のシステムも参考にし、相対的に論じていただけるとなお可
- ・ 話が細かくなっても、現実的な問題を考えるのが常道かと思います (例年の提出分を拝見しても)。一方で、現状ではどうしようもなさそうな「夢」を語ってもらってもかまいません。ただその際は、何がどうなっているのか、をできる限り考えてみてください。
- ・ Web 版 OPAC のない図書館の方は、適当な館を素材としてください。また、特別な問題意識があれば、あえて勤務館以外を対象としていただいても可。

・今回取り上げられたシステム

富士通 iLiswing 系 (3)、 富士通 iLiswave (1)
日本電気 LiCS-web(2)、 日本電気 LiCS-R (1)
NTT データ NALIS (2)、 京セラ丸善 ELCIELO (2)
日立 LOOKS (2)、 IBM CLIS (1)

・研修は皆さんのレポート (発表) を中心に

以下は、参考資料としての「まとめ」

図書館目録 = OPAC に求められる機能

検索の目的と目録の機能

- ・「既知の資料」を探すための目録 (ファインディングリスト)
 - 特定の資料がすばやく探せる
 - あいまいな情報からでも探せる
 - 同定識別と利用可能性の判断が確実にできる検索結果
- ・「未知の資料」を探すための目録
 - 特定キーワード (主題や著者) に合致する資料を「集中」
 - ブラウジング機能も重要
 - より望ましいものを選択できる検索結果

¹ レポート作成時に参照いただいた方もありますが、関西地区の公共図書館 WebOPAC を対象とした調査結果 (2010 年初に実施) を発表していますので、興味のある方は参照ください。

「公共図書館 WebOPAC の現在」(情報組織化研究グループ月例研究会)

<http://www.tezuka-gu.ac.jp/public/seiken/meeting/2010/201001.html>

カード目録から OPAC へ

統一規範の喪失

- ・ 入力データ (図書館員による作成) 出力データ (利用者に見える形)
 目録規則では OPAC 出力を統御できない (すべきでもない)
- ・ システム動作の多様性 (「可能性」の裏返しではあるが...)

ブラックボックス性の増大

- ・ 利用者にとってブラックボックス? 利用者視点で改善策を考えてみる
- ・ 図書館員にもブラックボックス? それ以前の問題 (責任の所在は...?)

データベースの基本的な機能

かつては難しかったことが、Web-OPAC では当たり前を実現

- ・ 空間的制約の打破 (どこからでもアクセス)
- ・ 特殊な機器・環境は不要 (PC さえあれば)
- ・ 時間的制約の打破 (24 時間稼働)

OPAC で全蔵書をカバー

- ・ 都道府県立レベルでも遡及入力はまず順調 (大学図書館では、まだ残りが)
- ・ 残る課題は多文化サービス (外国語資料) か

データの更新頻度

- ・ 即時更新 (「貸出中」等のステータス情報も含めて) が当たり前

検索の応答速度

- ・ データベース技術の進歩
 ヒット件数の多寡に関わらず、高速に検索集合作成
 (ただし、一覧表示の応答速度は表示件数に依存)
 ヒット件数と「最初の 10 件」なら高速に提供可能のはず
- ・ インターネット検索エンジン等の応答速度
 遅いシステムは、従来以上に「目立つ」
 特に、ヒット件数に比例して遅くなるシステムは問題

基本機能はかなりの割合でクリア

検索・表示そのものが問題に

検索語入力画面のインターフェース

検索対象の限定

- ・図書検索と雑誌検索
 - 分けて扱う傾向が強かった 最近はそうでもない
 - 統合的に検索できて当然 (年鑑、白書、統計... 自明に分割できるものではない)
 - デフォルトは「全資料対象」であるべき
- ・AV、電子資料等をどこまで細かく媒体区分するか？
- ・地域資料等の取扱い
 - 特別な資料群はそれのみに限定して検索可能とするべき
- ・所蔵館 (分館) 単位で絞り込める機能は必須
 - できないシステムも案外多い
- ・その他、キーワードとの組み合わせで絞り込む機能
 - 出版年、言語...
- ・キーワードを入力せずに全資料一覧
 - 一般図書には不要だが、媒体区分を細かくするなら意味がある
 - (どんなものかのイメージをつかんで、必要に応じて検索)

検索語入力フィールドの設計

A. 対象項目ごとに枠設定

- 「何から検索できるか」がマウス操作なしにわかる
- 画面の肥大化、利用者への圧迫感
- 全項目を横断的に検索する機能を持たせにくい

B. 対象項目をプルダウンメニューに (ふつうは複数枠を設定)

- 入力枠を減らしてコンパクトに
- 内容の同じプルダウンが複数あるわかりにくさ

C. 簡易検索では全項目対象とし、枠は一つ

- ひたすらシンプル

- ・大学図書館では C. (簡易検索) + B. (詳細検索) が主流
 - 空白で区切ると論理積 (AND)
 - 検索エンジンとの親和性 (Google ライク)
 - 図書館トップページに置くのも一般的
- ・公共と大学の設計思想の違い？
 - 「何から検索できるか」を利用者に伝えるという発想
 - ヘルプの役割では？
- ・簡易検索画面、トップページへの配置
 - 徐々に増えてきている
 - 特定のシステムではなく (図書館の考え次第?)
 - 落とし穴: 「Google ライク」に動作しないシステム仕様では誤解の恐れが
 - 検索対象項目と論理積の取扱い

- ・ 詳細検索画面の設計
 - 項目ごとの枠設定かプルダウンか？
 - すべての対象項目を画面に示す必要はない
 - 限定して意味のある項目 + 「全項目」
 - 例えば「注記」・・・注記だけに限定して意味があるか？
 - 実際は
 - 「全項目」のないシステム、やたらに選択肢の多いシステムも目立つ
- ・ 「タイトル」と「著者」の範囲
 - 「タイトルと責任表示に関する事項」(+ 著者標目) 以外の取り扱い
 - シリーズ、内容細目、目次情報

一致条件と論理演算

- ・ 「前方」「中間(部分)」「後方」「完全」
 - デフォルトは「中間一致」でよいのでは(前方一致の例を見かけるが)
- ・ 論理演算 (AND, OR, NOT)
 - それほど使われるものではないが、詳細検索画面では備えたほうが
 - 方式はさまざま： 複数入力時の扱い (AND か OR か) を選択
 - 行ごと、枠ごとの関係を選択
 - 演算子で入力式
 - 提供するなら、ある程度の柔軟性
 - 基本は、(A or B or ...) and (X or Y or ...) ではないか
 - 例) 地震の際のストレス
 - まず、「地震」「ストレス」の AND を想起
 - それぞれに、OR のバリエーション («震災」や「PTSD」) を
 - これができないと、有効性は減衰
 - 中途半端に枠を設けるよりは、演算子入力でよいかも

キーワード検索の諸相

- かつては、書誌記述とは別に「検索キーワード」を別途入力して検索に供していた
- 数に制限、長さ制限、使える文字種に制限...
- その後、書誌記述中の検索対象フィールドからキーワード自動切り出し
- 空白等を区切りとみなして切り出し
 - 分かち書きされたヨミからは単語ごとに切り出されるが、
 - 分かちのない表記形からは全体形しか切り出されない
- 今では、検索対象フィールドに対して、「全文検索」手法
- 「タイトル」： タイトル中のどこかにその語があればひっかかる

全文検索の2方式

・形態素解析法

辞書と照らし合わせて単語に分割し、キーワードとして格納

例)「図書館の学校」 「図書館」「の」「学校」
(「の」は無意味単語として無視することも)

長所:「意味」に沿った手法

短所:分かち書きを利用者に強制

最近は複合語でも探せるよう処理することが多い

例)「画像情報処理法」 「画像」「情報」「処理法」
「画像」「情報」「処理法」「画像情報」「情報処理法」「画像情報処理法」

さらに自動的に前方一致:「情報処理」でもヒット

システムの辞書に依存

固有名詞、古い当て字、自然でないカナ表記、などが苦手

・N-グラム法

決まった字数に分割し、順次キーワードとして格納

例)「図書館の学校」 「図書」「書館」「館の」「の学」「学校」

利用者の入力した検索語にも同様の分割を行う

単純かつ完全な「中間一致検索」が実現

長所:機械的(間違いの発生する余地がない)

短所:機械的(「京都」で検索すると「東京都」もヒット)

・一長一短があるが、N-グラム方式に傾きつつある?

大学図書館は、形態素解析方式が比較的多い(理由不明)

極めて融通の利かない形態素解析方式: NACISIS Webcat

キーワードの「正規化」

・意味のない違いを意識せず検索できるように

カタカナとひらがな、大文字と小文字、記号類の無視、旧漢字と新漢字

・検索時に(のみ)対処するのは非効率

Cat or CAT or cat or cAT or CaT or ...

索引時(データベース格納時)に、どちらかに強制変換

・一昔前のシステムのほうが、むしろ「常識」?

「全文検索」になって、「表示用データ」=「検索用データ」の感覚

・調べてみると結構さまざま

かな/カナ やって当然と思うが、できないシステムもある

拗音・促音 やるのが普通(まれにできないものも)

清音・濁音 対応はまっぴたつ(ノイズを増やすようにも思う)

長音記号 やるのが多数派(ノイズも増える。難しい問題)

え/へ 一部のシステムで(やりすぎではないか...?)

異体字 やるべきだが、文字種も多く複雑(できるシステムもある)

参考) NACISIS WebCat: 中国語も視野に「漢字統合インデックス」

- ・「ヨミ検索」の位置づけは、今後再検討が必要かも
 - もともと、カード目録・冊子目録の「排列」のために「標目はヨミ形で」
 - OPAC でももちろん一定の意味
 - 漢字かな混じりの入力は大変
 - 再現率の向上 (表記形は文字種や字体などにゆれ)
 - しかし現在では
 - コンピュータリテラシーの向上 (ワープロ入力は自然なこと)
 - 再現率の低下? (ヨミの付与されていない項目も検索対象となる場合)
 - 利用者をどう誘導するべきか?

少し高度な検索機能

典拠コントロール

- ・例：90年代の岩波「漱石全集」(奥付の表示が「夏目金之助」)
 - 「夏目漱石」で検索できないシステムも
- ・システムよりも MARC データに起因

内容情報の増強

- ・内容細目、内容紹介、帯情報、著者紹介等
 - 急速に広まっている (大学図書館と比べても)
 - 表示のみで検索対象としないケースも (もったいない)

主題検索のサポート

- ・同義語辞書
 - 辞書の信頼性が鍵 多くは企業秘密でブラックボックス
 - 更新できるべき (地域特有の語など)
- ・分類表の利用
 - 広まっているが、十分使えるものになっているかは疑問
 - 視覚的アクセス、分類表の名辞と索引語...
 - 件名標目表の利用は未踏

表示機能とナビゲーション

一覧表示とソート

- ・一覧表示に求められるもの
 - 既知資料の検索
 - それほど重要ではない (それほどヒット件数は多くはないはず)
 - 未知資料の検索
 - 一覧表示から目指す資料を選択する必要
 - ある程度の情報量と一覧性がともに必要

- ・一覧表示の限られたスペースに何を出すのか
表形式か連結式か
「最初の著者だけ」仕様がけっこうある 「ほか」と出したほうが...
タイトル関連情報、シリーズ名をどうするか
出版年を出さないシステムも見受けられる
入手可能性 (在架かどうか) もある程度わかるとよい
- ・ソート機能は案外充実 (大学図書館よりも?)
検索画面での選択でもよいが、一覧表示段階で切り替えられるのが望ましい
検索エンジンのような「ランキング表示」の可能性
大規模蔵書の場合、内容情報が充実してきた場合
- ・一覧表示の一画面出力件数
相当の件数を一覧していくことが (絞り込み検索より) 有効な場合も
初期設定は 10~20 件でも、100 件程度までは拡張できるとよい
検索画面での選択でもよいが、一覧表示段階で切り替えられるのが望ましい
- ・入力された検索語
一覧画面で表示すべき (誤りなどもわかる): 対応システムはむしろ少ない
検索画面に戻ると入力キーワードが消えるものも珍しくない
- ・絞り込み検索
一覧画面でできるとよい
できなくとも、入力状態を保持した検索画面へ戻れるように

書誌情報の詳細表示

- ・必要最小限の項目 vs. 全部出す
絞り込みすぎの感のあるシステムも
ブラックボックス (なぜヒットしたのかわからない) 無用の不安感
検索対象とするなら、詳細表示に出すべき
- ・ハイライト表示
広まっていないが、有用性は非常に大きい
(特に、内容紹介など検索対象項目が拡張された場合)
インターネット検索エンジンと対比して

ナビゲーションのための配慮

- ・画面の統一性
- ・そこに至る経緯を表示すべき
何で検索してそこへ到達したのか
- ・検索履歴の再利用 (どれだけ有効性があるか)
- ・ハイパーリンクの有効活用
著者や件名をクリックすると当該の一覧表示に
ある程度広まってきた

典拠コントロールとの関係

著者名典拠がどこまで管理されているか：逆効果の場合も

雑誌検索のナビゲーション

- ・大学図書館ではほぼ統一：『学術雑誌総合目録』の伝統
検索 書誌情報(雑誌タイトル単位) 包括所蔵(例：1-3,6-13+)
物理単位(新着巻号、製本情報)
- ・公共図書館ではまちまち
いきなり物理単位でなく、雑誌タイトル単位を介すべきでは？
(物品としての管理に傾斜しすぎ)

ヘルプ機能など

ちゃんと書くべき

「ヘルプなしで使えるシステムが理想」「そんなに読んでくれない」は正しいが...
それでもきちんと書くのが提供者の責任
カスタマイズしたのにヘルプはもとのまま...(論外)

絶対に、司書が書くべき

メーカーに「わかりやすいヘルプ」を要求しても無理
随時書き換えられる仕様を要求
新しいシステムに対して、動く前に完璧なヘルプは書けない

用語の使いかた・説明のしかた

本当に難しい・・・
多少長くなっても、例示を入れるべきでは

ヘルプの単位

ピンポイントで示せ、かつ通読もできるのが望ましい

画面上の言葉づかい

細かい言葉も意外に大事
「著者」「キーワード」... (明快な解は難しいことも多い)
ヘルプを自分で書いてみると、問題点がわかるのでは

「次世代 OPAC」?

「資料組織法の現在」のレジюмеに

「次世代」も重要だが、今の OPAC への注意も...

ベンダ任せでなく、専門職としての当事者意識を持って大小の問題に目を配る姿勢をとらないと、同じことの繰り返しでは